



ひよこだよ



都立葛飾ろう学校 乳幼児教育相談
令和6年1月15日 No. 9

新年明けましておめでとうございます。いよいよ2024年が始まりました。今年も、保護者の皆様そして元気な子供たちとともに、充実したひよこ組の活動ができるようスタッフ一同取り組んで参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

皆さんはどのように新年を迎えられたでしょうか。新型コロナウイルス感染症への行政対策が5類に移行されてから初めての年末年始でしたので、帰省されたり旅行に行かれたり等、おじいちゃんおばあちゃんや親戚とお正月を過ごされた方もいらしたのではないのでしょうか。

顔を合わせて互いの近況を話せる家族団欒のひとつきは、うれしいものですね。いろいろな人との交流をたくさん経験させてあげられる良い機会になったことと思います。大切に積み重ねていただきたい時間です。



聴者の理解・ろう者の理解

さて、昨年は、手話やろう者の世界をテーマとして取り上げられたドラマが数多く放送されました。御覧になった方も多いのではないかと思いますが、多くのドラマは、聴者がろう者の役を演じるものでした。しかし、昨年12月にNHKで放送された『デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士』というドラマは、20名近いろう者・難聴者の役を実際にろう者・難聴者の俳優の方たちが演じていました。従来のドラマや映画を超えたリアリティでろう者やコーダ（聞こえない・聞こえにくい親をもつ聞こえる子ども）が抱える悩みや葛藤がとても繊細に描かれている作品です。原作は丸山正樹さんの小説『デフ・ヴォイス 法廷の手話通訳士』で、ロコミで静かな話題を集め、“読書の甲子園”と言われる全国高校ビブリオバトルでグランドチャンプ本になったのだそうです。読者の熱い要望によりドラマ化された作品とのことです。また、この作品を制作するにあたって、ろう者・難聴者の俳優の方たちがスムーズに撮影に臨める現場をどう作るか、どう合図を出すか等、様々なことが調整されたり工夫されたりしたそうです。昨今、海外でも聴覚障害者を話題にした映画『Coda コーダあいのうた』が公開されたり社会的な関心が高まっています。2025年には、世界規模で行われる聴覚障害者のための総合スポーツ競技大会「デフリンピック」が日本で初めて開催されます。ろう者・ろう文化についての理解が広まる機会となると期待したいです。

今回は、「ろう文化」について考えてみたいと思います。昨年末、教員向けの研修会でろう者の野口岳史さんの講演を聞く機会がありました。野口さんは、現在、国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科の教官をされており、NHKの手話ニュース845のキャスターとしてもご活躍されている方です。講演の中では、日本手話と日本語を比較し、ろう文化と聴者の文化

の違いについてお話してくださいました。言語学では、言語やその文化を比較研究する際にハイコンテキスト文化とローコンテキスト文化という観点で分類する方法があるそうです。コンテキストとは文脈のことです。ハイコンテキスト文化とは、文化の共有性が高く、言葉以外の表現に頼るコミュニケーション方法を指します。つまり、言葉による説明が少なく、会話の際は表情の変化や声のトーン、体の動きなど文脈からの行間を読むことが求められ、言語化されない、その背景にあるものを察しながらコミュニケーションをとる文化です。日本語はこちらに分類されます。一方で、ローコンテキスト文化とは、言葉による表現を重視するのが特徴で、文脈や事前の情報に頼らず、伝えるべきことをすべて言語化します。日本手話はこちらに分類されます。では、この日本語の文化（聴者の文化・ハイコンテキスト文化）と日本手話の文化（ろう者の文化・ローコンテキスト文化）についてどのような違いがあるのか例を挙げて見ていきたいと思っています。

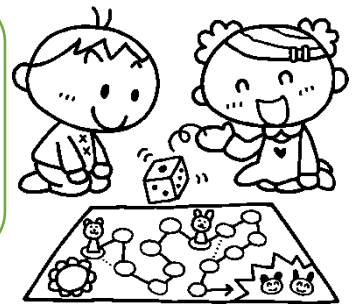


例① Aさんが仕事をしていたのですが、その日は体調が優れませんでした。しかし、上司から、週末だからご飯でも食べに行かないかと誘われます。Aさんは翌日にあるイベントに参加する予定だったので、早く帰りたいのですが、仕方なく上司に付き合い食事に行きました。Aさんは、食事に行って帰りが遅くなったために、体調が悪化してしまい、イベントの参加を断ることになってしまいました。もし、皆さんだったらどのように断りの連絡を入れるでしょうか？

日本語を使用する聴者の場合、「急で申し訳ありません。体調を崩してしまったので明日のイベントを休みます。」と伝えると思います。日本語はすべてを言語化しないことを好む文化であるため、このような伝え方になります。では、日本手話を使用するろう者の場合はどうでしょう。日本手話は、たくさんのことを言語化して伝える文化であるため、「実は、昨日から体調を崩してしまって。早く帰りたいけれど昨夜、上司につかまってしまい、どうしてもご飯を食べに行かなくてはならなくなりました。ご飯を食べに行ってさらに体調が悪化してしまい、明日は行けなくなりました。ごめんなさい。」というように、こと細かく言語化して伝える方が十分に情報が伝わり互いに納得のいく会話になるそうです。もし聴者がろう者のように、欠席の理由を細かく伝えたらどうでしょう。受け取る側は、ずいぶん長い言い訳をしてくる人だな、何か言い訳をしなければならない理由が他にあるのだろうかと推測されてしまいます。このように、ろう者の文化と聴者の文化には表現の仕方、情報の受け取り方に違いがあることが分かるかと思えます。



例② あるイベントに行くか行かないかを聞かれたBさん（聴者）の返答についての例です。Cさん（ろう者）が、「来週のこのイベントに行く？」と尋ねました。尋ねられたBさん（聴者）は「んー、行きたいけど・・・」と手話とにこやかな表情で伝えました。質問をしたCさん（ろう者）は、にこやかな表情と手話の行きたいという部分を見て、きっとこの人は参加するんだろうなと理解しました。しかし、イベント当日、Bさん（聴者）はイベントに現れませんでした。



この例では、なぜBさんとCさんのコミュニケーションにすれ違いが生じたのでしょうか。Bさんの「行きたいけど・・・」という表現ですが、聴者同士の場合であれば、声のイントネーションで行きたくない気持ちを察することができるのですが、ろう者のCさんにとっては、「行きたいけど」と途中で終わってしまったBさんの発言はわかりにくいものでした。また、表情がにこやかな顔をしていたため、Cさんは、(Bさんは) 行くのだと思ってしまったようです。Bさんの返答が、「行きたいけど無理です」とか「その日は予定があって行けない」とはっきりと行けないことを言葉にした方が、Cさんにはわかりやすかったと考えられます。断ること自体失礼ではなく、はろう者の方とのコミュニケーションでは、その裏にある理由や背景もきちんと伝える方が、不要な誤解を生まずに理解し合えたことでしょう。少し言いにくいこともはっきりと表現することが大切になります。

例③ 手土産を渡すときのシチュエーションです。Dさん（聴者）は「これ、つまらないものですが、お口に合うかどうかかわからないのですが。」と手話で表現し、Eさん（ろう者）に手土産を渡しました。一方、Eさん（ろう者）は「これ、あそこで行列していて、おいしそうだなと思って買ってきたの。高かったのよ。食べてみて。」と言ってDさん（聴者）に渡しました。

違いは一目瞭然ですね。聴者は、手土産を渡すとき「つまらない」という手話表現をしました。聴者同士の会話では、よく使われる言葉です。目上の人に対して、へりくだった言い方をすることで相手を尊重する気持ちが表現されています。しかし、ろう者から見ると、手話で「つまらない」という表現を使うと、手土産に対してマイナスのイメージを受けてしまう表現なのだそうです。つまり、つまらないものをどうして人にあげるのかという誤解が生じてしまうのです。Eさん（ろう



者)の表現はどうでしょう。買ったときのお店の状況をそのまま伝えていきます。この例からも、聴者とろう者の表現の仕方の違いが分かるかと思います。

このように、音声をコミュニケーション手段として使う聴者は、声のトーンや音の高さ、大きさなどの違いを感じ取ってその裏にある理由や背景を推測しながら、他者とコミュニケーションを取っています。一方、ろう者の方は、表情や視線、指差し、空間をととても上手に使った手話による表現で、視覚情報を中心に、他者とコミュニケーションを取っています。聴者の当り前はろう者の当り前ではなく、逆にろう者の当り前は聴者の当り前ではないということを理解し、互いのコミュニケーション方法の特徴を理解し合っていくことで聴者とろう者のコミュニケーションはさらに深まっていくと私は考えています。2025年のデフリンピックには、多くのろう者、難聴者が東京を訪れることでしょう。お互いを理解し合い、みんなでデフリンピックを盛り上げていきたいですね。(担当 下里)

